

It分裂文の焦点に生じる付加詞と下接詞*

加 藤 雅 啓*

(平成19年9月28日受付；平成19年11月8日受理)

要 旨

英語には、統語構造上、文の焦点が特定の位置に生じる構文がある。it 分裂文は、学校文法でも it -that の強調構文として知られているように、主節 (it 節) と従属節 (that 節) の複文構造から成り、焦点が主節の be 動詞の後の位置に固定した構文である。この焦点位置に生起できるのは、典型的には名詞句と前置詞句であるとされているが、これら以外の文法項目も焦点として生じることができることが知られている。本稿は、このうち Quirk et al. (1985) における付加詞、及び下接詞をとりあげ、その焦点位置での生起可能性について、中右 (1994) のモダリティ理論の枠組みによって一般化を試みるものである。

KEY WORDS

adjunct	付加詞	focus	焦点
it-cleft	it 分裂文	modality	モダリティ
subjunct	下接詞		

0. はじめに

英語の it 分裂文については、統語論はもちろん、意味論・語用論においても数多くの論考がある。it 分裂文の焦点位置に生じることのできる要素としては、典型的には名詞句や前置詞句等があるが、これ以外の要素については十分に明らかにされているとは言い難いのが現状である。

Quirk et al. (1985: 504) は、“...and unlike other adverbials, an adjunct can be the focus of a cleft sentence:” と述べ、他の副詞相当語句 (adverbial) と異なり、付加詞 (adjunct) は it 分裂文の焦点になることができると指摘している：

- (1) It was *because of his injury* that Hilda helped Tony. (Quirk et al. 1985: 504)
- (2) It's *rarely/seldom* that he loses any money. (ibid.: 548)
- (3) *It was *fairly* that he sprang at her. (ibid.: 567)
- (4) *It was *completely* that he ignored your request. (ibid.: 597)

(1) の *because of*, (2) の *rarely/seldom* は付加詞であるので it 分裂文の焦点に生起できるが、(3) の *fairly*, (4) の *completely* は下接詞 (subjunct) であるため、it 分裂文の焦点として生じることはいできない。

ところが付加詞であっても it 分裂文の焦点に単独では生起することができない例がある：

- (5) *It is *generally* that the theory is accepted.
- (6) *It was *usually* that she saw her patients in the mornings. (ibid.: 546)
- (7) *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck. (ibid.: 561)

(5) - (7) の *generally*, *usually*, *categorically* は、いずれも Quirk et al. (1985) では付加詞として分類されているが、単独では it 分裂文の焦点位置に生起することはできない。

Quirk et al. (1985) は、(5) - (7) のように付加詞でありながら、it 分裂文の焦点位置に生じることができない例について、何らかの原理に基づいた説明を行っているわけではなく、言語事実の記述にとどまっている。本稿では、副詞相当語句 (adverbial) のうち、付加詞と下接詞をとりあげ、どのような場合に it 分裂文の焦点として生起できるのか、意味論、とくに中右 (1994) の階層意味論の立場から考察を進めることにする。

*言語系教育講座

1. 付加詞の焦点化

1. 1 付加詞の統語的特徴

Quirk et al. (1985: 504) によれば、付加詞 (A) は他の副詞相当語句とは異なり、主語 (S)、目的語 (O)、補語 (C) などと極めて類似した統語的振る舞いを見せる¹：

- (8) a. Hilda helped Tony because of his injury.
 b. It was *Hilda* that helped Tony because of his injury. [S]
 c. It was *Tony* that Hilda helped because of his injury. [O]
 d. It was *because of his injury* that Hilda helped Tony. [A]

(8b)と(8c)は、それぞれ(8a)の主語 (*Hilda*)、及び目的語 (*Tony*) が it 分裂文の焦点となっている。(8d)は、付加詞である *because of his injury* も it 分裂文の焦点として生起することができることを示している。

次の例では、付加詞である *because of his injury* は、主語、目的語同様、選択疑問文における選択の対照、あるいは否定文における対照的焦点となることができることが分かる：

- (9) a. Did *Hilda* help Tony or did *Bill* help him? [S]
 b. Hilda didn't help *Tony* but she helped *Wendy*. [O]
 c. Did Hilda help Tony *because of his injury* or (did she help him) *to please her mother*? [A]
 d. Hilda didn't help Tony *because of his injury* or (did she help him) *to please her mother*. [A]

また、付加詞は、主語、目的語同様、焦点下接詞 *only* の焦点となることができる：

- (10) a. Only *Hilda* helped Tony... [S]
 b. Hilda only helped *Tony*. [= 'Hilda helped only *Tony*...'] [O]
 c. Hilda only helped Tony *because of his injury*. [= Hilda helped Tony only *because of his injury*.] [A]

さらに、次の例では、付加詞は主語、目的語、及び補語同様、省略や代用表現のスコープ内に入っていることが分かる：

- (11) a. *In 1981* [A], Grace *became a teacher* [C] and so did Harnish.
 = Grace *became a teacher* [C] *in 1981* [A] and Harnish *became a teacher* [C] *in 1981* [A].
 b. Fred *carefully* [A] *cleaned his teeth* [O] but Jonathan didn't/not.
 = Fred *carefully* [A] *cleaned his teeth* [O] but Jonathan didn't *carefully* [A] *cleaned his teeth*. [O]

最後に、付加詞は主語、目的語、及び補語と同様に、疑問の対象とすることができる、と指摘されている：

- (12) a. *Who* became a teacher? (*Grace* [S])
 b. *What* did Grace become? (*A teacher* [C])
 c. *Who (m)* did Hilda help? (*Tony* [O])
 d. *Why* did Hilda help Tony? (*Because of his injury* [A])

このように、付加詞は他の文法範疇とよく似た統語的振る舞いを見せることが分かる。ここでとくに注目したいのが、(8d)で見たような it 分裂文の焦点位置における付加詞の生起可能性である。

1. 2 頻度付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 547) は、“Most frequency adjunct can be the focus of a cleft sentence, particularly if they are modified or are in a negative or interrogative focal clause.”と述べ、頻度の付加詞の多く、とくに他の要素によって修飾される、あるいは否定や疑問の焦点 (節) である場合は、分裂文の焦点になることができると指摘している：

- (13) a. (?) It's *very frequently* that he loses money.
 b. It's *not often* that have a chance to speak to him.
 c. Is it *often* that she drives alone?
- (14) a. It's *all too frequently* that people don't offer to help.
 b. Is it *very often* that she doesn't speak to him?
 c. It isn't *very often* that she doesn't speak to him.

(13a)は、頻度の付加詞 *frequently* が他の副詞 *very* に修飾され、it 分裂文の焦点となっている例である。(13b), (13c)は、いずれも頻度付加詞 *often* が否定、あるいは疑問の対象となり、it 分裂文の焦点となっている例である。(14)の例も同様である。

1. 3 様態の付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 561) は、“Normally, when manner adjuncts are realized by adverbs, they cannot be the focus of a cleft sentence, but their acceptability is increased if they are modified or if the focal clause is interrogative or negative.”と述べ、副詞として具現化された様態の付加詞は、単独では分裂文の焦点にはなれないが、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、否定の焦点となる場合は、容認性が向上すると指摘している：

- (15) a. *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck.
 b. ?Was it *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck?
- (16) a. ?It's *in the French style* that they cook.
 b. It isn't *in the French style* that they cook.
- (17) a. ??It was *violentlyoudly* that they argued.
 b. (?) It was *so very violentlyoudly* that they argued.
- (18) It was *with the utmost care/precision/caution* that the last girder was laid in place.

(15a)は、様態の付加詞 *categorically* が単独で it 分裂文の焦点に用いられている例であるが、不適格となっている。しかし、(15b)では、焦点として *categorically* が用いられているが、it 分裂文が疑問化されているため、容認性が向上している。(16)も同様である。(17b)では、修飾要素 *so very* が付加されることによって容認性が改善することが見て取れる。(18)は、*the utmost* によって様態の付加詞 *care/precision/caution* が修飾されているため、適格文となっている。

1. 4 手段・道具・動作主の付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 562) は、“...means, instrument, and agent adjuncts can readily become the focus of a cleft sentence, even as realized by single adverbs (though less idiomatically in these circumstances)...”と述べ、手段・道具・動作主の付加詞は単独で用いられた場合でも、it 分裂文の焦点になることができると指摘している。

- (19) a. It was *with a bullet* that he was killed.
 b. It was *by a terrorist* that he was killed.
 c. It was *intonationally* that these linguistic units were separated.

(19a)は手段の付加詞、(19b)は動作主の付加詞が、(19c)は手段を表す付加詞が、単独で it 分裂文の焦点として用いられている例である。

本節では、頻度付加詞、及び手段・道具・動作主の付加詞は、単独で it 分裂文の焦点になることができ、様態の付加詞は、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、否定の焦点となる場合は it 分裂文の焦点になることができる、ということを見てきた。

2. 下接詞の焦点化

2. 1 下接詞の統語的特徴

Quirk et al. (1985: 566) は、“they (=subjuncts) cannot usually be treated grammatically in any of the four ways

stated in 8.25 as being applicable to adjuncts.”と述べ、下接詞は、付加詞が持つ主語、目的語、補語と同様な統語的特徴（1.1 参照）を持たないと指摘している：

- (20) a. *It was *fairly* that he sprang at her...
 b. *Did he spring at her *fairly* or...?
 c. *He only *fairly* sprang at her...
 d. *[How did he spring at her...?] **Fairly*.

下接詞である *fairly* は、(20a-d) に見るように、it 分裂文の焦点として生起することができず、選択疑問文の選択の対象となることもできず、また、焦点下接詞 *only* の焦点となることもできず、さらに、疑問の対象となることもできない。次の例に見るように、下接詞に分類される増幅詞 (amplifier) の *completely* も it 分裂文の焦点として生起することはできない：

- (21) *It was *completely* that he ignored your request. (Quirk et al., 1985: 597)

2. 2 下接詞から付加詞への転換

Quirk et al. (1985: 573-574) によれば、すべての下接詞が it 分裂文の焦点として生起することができないというわけではなく、主語指向 (subject-oriented) の下接詞は、付加詞として解釈することができ、it 分裂文の焦点に生起できるものがある、と指摘している：

- (22) a. Leslie greeted the stranger *casually*. [‘in a casual offhand manner’, his greeting was casual]
 b. *Casually*, Leslie greeted the stranger. [‘Leslie was casual, offhand, when he greeted the stranger’]
 (23) It was *casually* that Leslie greeted the stranger.

(22a) では、*casually* は付加詞として解釈されると、「気楽に、何気ない方法で」という様態の意味を伝え、(22b) では、下接詞として主語である Leslie の属性に言及し、「ぶっきらぼうに、ぞんざいに」という意味になる。(23) は、*casually* が付加詞として解釈されるため、it 分裂文の焦点として生起できることを示している例である。

以上、Quirk et al. (1985) にしたがって、第 1 節では、頻度付加詞、及び手段・道具・動作主の付加詞は、単独で it 分裂文の焦点になることができるが、様態の付加詞は、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、否定の焦点となる場合は it 分裂文の焦点になることを確認した。第 2 節では、下接詞は、原則的には it 分裂文の焦点になることはできず、主語指向の下接詞の場合、文脈によって付加詞と解釈できるものは it 分裂文の焦点になることができる、ということを見てきた。

3. Quirk et al. (1985) における言語事象の記述

Quirk et al. (1985: 504, 1071) は、because 句 (節) は付加詞として機能するため、it 分裂文の焦点に生じることができる」と主張している：

- (24) a. It was *because of his injury* that Hilda helped Tony. (= (8d)) (Quirk et al., 1985: 504)
 b. It's *because they are always helpful* that he likes them. (ibid.: 1071)

一方、since 節は離接詞 (disjunct) であるため it 分裂文の焦点とは成り得ない、と次の例を挙げている：

- (25) a. *It is *since she ran out of money* that she had to defer buying a new car. (ibid.: 613)
 b. *It's *since they are always helpful* that he likes them. (ibid.: 1071)

ところが、言語事象をさらに詳細に見てみると、because 句 (節) が付加詞として機能していながら、it 分裂文の焦点として生じることができる場合とできない場合があることが分かる：

- (27) a. He is not coming to class *because he's sick*.
 b. It's *because he's sick* that he's not coming to class. (中右, 1994: 162)
- (28) a. He is not coming to class, *because his wife told me*.
 b. *It's *because his wife told me* that he's not coming to class. (ibid.)
- (29) a. The prime minister is expected to step down, because newspapers have reported the possibility of his resignation.
 b. *It's *because newspapers have reported the possibility of his resignation* that the prime minister is expected to step down.

(27b), (28b), (29b) の *because* 節は、いずれも付加詞であるが、(27b) では *because* 節が it 分裂文の焦点として生起できるのに対し、(28b), (29b) の *because* 節はそれが不可能である。

これらの例を見てみると、ある副詞句（節）が付加詞であることは、その副詞句（節）が it 分裂文の焦点として生起できることに對する十分条件とは成り得ないことが分かる。

さらに、次の例に見るように、時を表す下接詞は it 分裂文の焦点として生じることができる：

- (30) a. It was *only just now* that I remembered our appointment.
 b. ?It is *only a little* that we play bridge. (Quirk et al., 1985: 582)

したがって、ある副詞句（節）が it 分裂文の焦点として生起できることは、その副詞句（節）が付加詞であることの必要条件でもないことが明らかである。

(27)–(29)、及び(30)に関わる分析から、副詞相当語句が it 分裂文の焦点として生起できるか否かということに限って見てみると、付加詞、あるいは下接詞などの統語的分類は、言語事象を正しく反映しているとは言い難い側面があり、この意味で記述的妥当性について問題が残されていると思われる。

4. 階層意味論とモダリティ表現

4. 1 中右 (1994)

中右 (1994) は、文の意味の基本骨格はモダリティと命題内容からなる階層構造をなしているとする階層意味論を展開している。モダリティは、①話し手、②発話時点、③心的態度という3つの要素から成り立っており、概略、「発話時点における話し手の心的態度」ということばでまとめることができる主観的意味成分のことである (中右, 1994: 42)。モダリティは、さらに「命題態度」を表すSモダリティと「発話態度」を表すDモダリティの2つのタイプに分けられる。命題態度とは、「命題内容の真偽値（真か偽の値）について話し手が下す査定判断のことであるのに対し、発話態度とは、一定の談話コンテキストのもとで話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識（意図、姿勢）のことである (中右, 1994: 41)」と述べられている。命題態度は独立節としての文に内在的な義務の意味成分であるのに対し、発話態度は非義務の意味成分であり、いずれのタイプも命題の真偽値に関して影響を及ぼさないと規定されている。中右 (1994) で展開されているモダリティに関する議論をまとめると次の表1になる：

表1

モダリティ	
Sモダリティ	Dモダリティ
・定義：話し手が発話時点において全体命題PROP ⁴ （の真偽いずれかの値）に対してとる信任態度（コミットメント）のこと	・発話主体の態度表明、つまり発話・伝達態度のこと
・命題態度（命題内容の真偽値について、話し手が下す査定判断・信任態度）を表す	・発話態度（談話コンテキストのもとに、話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識（意図・姿勢））を表す
・命題内容を限定する	・談話要因のもとに発話の在り方、伝達様式を限定する
・独立節としての文に内在的な義務の意味成分	・独立節としての文に外在的な随意的意味成分
・全体命題PROP ⁴ を作用域とする	・構文全体、つまりSモダリティ＋全体命題PROP ⁴ を作用域とする
・当該の言語表現を省くと同じ命題態度が保持されない	・当該の言語表現を省いても同じ命題態度が保持さる

4. 2 It分裂文とモダリティ表現

中右 (1994) は、焦点位置が固定している有標構文として it 分裂文を取り上げ、階層意味論の観点から次のように述べている：

- (31) a. it 分裂文は統語論的には複文構造を形作っているにもかかわらず、意味論的には全体で一つの独立節に相当する意味構造を備えている。
 b. it 分裂文の全体命題PROP¹の成分は、主節の焦点部分と従節の前提部分とに二分されている。
 c. it 分裂文の主観的モダリティ成分は、前景の主節にのみ生じる。
 d. それゆえ、主節の命題成分こそが文の焦点である。 (中右, 1994 : 139)
- (32) Sモダリティは、それが作用域とする全体命題PROP¹内の要素を焦点部位とする。ただし、その要素は語彙論的、統語論的、韻律論的、語用論的条件を同時に満たしていなければならない。 (ibid. : 151-152)

(31) 及び (32) を要約すると、①焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、Sモダリティではないこと、②Sモダリティはむしろ、焦点化を引き起こす要素、つまり焦点因子であること、それゆえ、③焦点化される命題内容成分はモダリティの焦点を形作ること、ということが出来る。これらのことをふまえたうえで、it 分裂文でモダリティ表現が焦点化されるか否かについて、次の例を挙げて論じている：

- (33) a. In all probability, John disagrees with you.
 b. *It is *in all probability* that John disagrees with you.
 c. *In all probability*, it is John that disagrees with you. (ibid.: 155)

(33) の各文において、全体命題を形作るのは、*John disagrees with you* の部分であるのに対し、*in all probability* の部分はSモダリティを形作っている。ここで、(33b) が不適格なのは、まさしくモダリティ表現が焦点化されているからである。その一方、(33c) が適格文であるのは、命題内容成分である *John* が焦点化されているからにほかならない。以下、中右 (1994) で論じられている it 分裂文の焦点位置に生起する副詞を巡る議論を概観することにする。

4. 3 時間副詞と it 分裂文

中右 (1994) は、時間副詞が it 分裂文の焦点として生起できるか否か、ということに関して、統語的な制約ではこれを正しくとらえることができず、当該の時間副詞が命題内容成分であるか、あるいはモダリティ成分であるか、という意味論的観点によって初めてとらえることができる、と主張している：

- (34) a. *It was *yesterday* John who replied politely.
 b. It was *usually* John who replied politely.
- (35) a. It was *yesterday* that John replied politely.
 b. *It was *usually* that John replied politely. (ibid.: 158)

(34a) と (34b)、及び (35a) と (35b) は、統語的には全く同じ構造であるにもかかわらず、その適格性に相違があるが、これを統語論的制約でとらえることは困難である。これについて、中右 (1994 : 158) は、「焦点位置に生起可能かどうかの違いから、*yesterday* は命題内容成分なのに対し、*usually* はモダリティ成分であることがはっきりする。」と述べている。すなわち、it 分裂文の主節の焦点になることができるのは、一つの命題内容成分だけである、ということが出来る。

4. 4 頻度副詞と it 分裂文

中右 (1994 : 159) は、*always*, *often*, *occasionally* などのように頻度を表す副詞を頻度副詞と呼び、*usually* などの他の副詞と区別している。さらに、次の例をあげ、「頻度副詞は本来、テンス領域に帰属する命題内容成分である」と分析している：

- (36) a. **Only usually* did he reply politely.
 b. *Only occasionally* did he reply politely.

- (37) He *did not always* reply politely, but he did reply politely *sometimes*. (ibid.: 158)

(36) から、*occasionally* は *Only* によって焦点化できるが、*usually* はそれができないことが分かる。さらに、(37) では、*always* と *sometimes* が対照の焦点となっていることが明らかである。これらのことから、頻度副詞は命題内容成分として機能している、と指摘されている。

この主張は、すでに 1.2 節でみてきた Quirk et al. (1985: 547) の例文によってさらに確認することができる（以下に再掲）：

- (38) a. (?) It's *very frequently* that he loses money.
 b. It's *not often* that have a chance to speak to him.
 c. Is it *often* that she drives alone?
- (39) a. It's *all too frequently* that people don't offer to help.
 b. Is it *very often* that she doesn't speak to him?
 c. It isn't *very often* that she doesn't speak to him.

いずれの例も、頻度の付加詞が it 分裂文の焦点となっている例である。

4. 5 強意副詞と it 分裂文

中右 (1994 : 160) は、*only*, *particularly*, *also*, *purely*, *chiefly*, *simply* などの副詞は、焦点要素を限定する働きがあることから、これらの副詞を強意副詞と呼んでいる。強意副詞は、it 分裂文に生じるときは、主節の焦点要素に付加的に隣接して生じるのが通例である、と述べている：

- (40) a. It was *{only/particularly/also}* John who protested.
 b. It was *purely out of spite* that he assigned it that number.
 c. It is *chiefly in this sense* that Berkeley denies matter. (中右, 1994 : 160)

中右 (1994 : 160) によれば、これらの強意副詞は主節内に生じ、話し手の主観そのものを反映しているため、D モダリティに分類される。したがって、(31) 及び (32) から、これらの副詞は単独で it 分裂文の焦点に生じることとはできないと予測される：

- (41) a. *It was *{only/particularly/also}* that John protested
 b. *It was *purely* that he assigned it that number.
 c. *It is *chiefly* that Berkeley denies matter.

4. 6 時の副詞節と it 分裂文

中右 (1994 : 161) は、時を表す接続詞は内在的に命題内容成分としての性質を備えているので、それが導く時の副詞節は it 分裂文の焦点としてに生じることができる、と次の例をあげて主張している：

- (42) a. It is *when we forget about the cultural side of our behavior* that we are most likely to be surprised or confused by the other person's behavior.
 b. It's *since he began the research on his dissertation* that Bill has gone nuts.
 c. It was *not until I got home* that I realized that I had lost my keys. (中右, 1994 : 161)

いずれの例でも、時を表す副詞節が節全体として命題内容成分としての性質を有していると考えられる。

4. 7 理由のbecauseと it 分裂文

中右 (1994 : 162) は、理由を表す *because* を巡って、極めて興味深い議論を展開している。*because* は潜在的にありまいで、命題内容成分として客観的因果関係を表す場合と、D モダリティとして主観的推論関係を表す場合があるという：

- (43) a. He is not coming to class *because he's sick*.
 b. It's *because he's sick* that he's not coming to class.
- (44) a. He is not coming to class, *because his wife told me*.
 b. *It's *because his wife told me* that he's not coming to class. (中右, 1994 : 162)

(43)は「彼は病気なのでクラスに来ないよ」といっているのに対し、(44)は「彼はクラスに来ないよ、だって奥さんがそういっていたよ」と解釈できる。(43)の *because* 節は、病気が原因でクラスを欠席するという因果関係を述べており、これは定義上、命題領域に帰属する客観的関係を表していることから、命題内容成分である。一方、(44)の *because* 節は、モダリティ領域に帰属する主観的な推論関係を述べており、主観的推論関係を表すDモダリティ表現である。(43b)と(44b)の容認性の違いは、命題内容成分のみ焦点化できる、という(31)、及び(32)の一般化が妥当であることを示している、と中右(1994)は論じている。

5. 命題領域とモダリティ領域の認知転換

中右(1994 : 139, 151)は、(31)、及び(32)で明らかにしたように、焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、モダリティではない、と主張している。このことをit分裂文にあてはめると、it分裂文の焦点位置には、モダリティ表現は単独で生起することはない、ということが論理的帰結として得られる。しかしながら、it分裂文をよく見てみると、モダリティ表現が単独で焦点位置に生じている例がある：

- (45) It was *casually* that Leslie greeted the stranger. (Quirk et al., 1985: 574)

中右(1994)にしたがえば、*casually*は、定義上、Dモダリティであり、単独ではit分裂文の焦点位置に生じることとはできないはずである。この例をもって(31)、及び(32)で提示した「焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、モダリティではない」という一般化を廃棄するには早計である。

すでに4.4節で概説したように、頻度副詞は、本来、テンス領域に帰属する命題内容成分である。しかし、頻度副詞がモダリティ成分としてit分裂文の焦点位置に生じている例がある：

- (46) a. It is *always* oneself that one encounters in traveling.
 b. It is *often* your children that howl during the night. (中右, 1994 : 159)

(46)では、*always*、及び*often*は命題内容成分ではなく、モダリティ成分として機能している。これについて、中右(1994 : 159)は、「理論的には、命題領域からモダリティ領域への認知転換が起こっているとみたい」と示唆している。it分裂文は文の焦点が主節に固定している有標の構文であり、中右(1994)にしたがえば、その焦点として生じることができるのは、命題内容成分だけである。このことから、ある要素が文の焦点であれば、それは命題内容成分である、ということになる。中右(1994 : 159)は、Greenbaum(1969)から次の例を引用し、*only*によって焦点化される要素は「文の焦点」になることができる、と論じている：

- (47) a. *Only occasionally* did he reply politely.
 b. **Only usually* did he reply politely. (ibid.)

(47a)の*occasionally*は、*only*によって焦点化されている。したがって、*occasionally*は文の焦点になることができ、命題内容成分であるといえる。一方、*usually*は、*only*によって焦点化することはできない。よって、*usually*は命題内容成分ということとはできない。このことから、中右(1994)は、本来的には命題内容成分である頻度副詞が、(46)では、モダリティ成分として機能している、と結論づけている。

この議論を(45)の*casually*にあてはめて考えてみると、*casually*は、本来、モダリティ領域に属するが、(45)では命題領域へ認知転換されている、と想定することができる。このことを次の例で確かめてみよう：

- (48) *Only casually* did Leslie greet the stranger.

(48)が適格文であることから、*casually*は*only*によって焦点化されていることが分かる。したがって、(48)では、

casually はモダリティ領域から命題領域へ認知転換され、命題内容成分となっているといえる。このことから、(45)では、*casually* が命題内容成分となっており、it 分裂文の焦点となることが可能となる理由が導かれる。²

6. まとめ

本稿では、(27)-(29), 及び(30)に関わる分析から、副詞相当語句がit 分裂文の焦点として生起できるか否かということに限って見てみると、Quirk et al. (1985)における付加詞、あるいは下接詞などの統語的分類は、言語事象を正しく反映しているとは言い難い側面があることを指摘し(3節)、中右(1994)の階層意味論におけるモダリティ理論の枠組みによって、it 分裂文の焦点に生起する副詞相当語句の意味的特性について、新たな提案を行った。この際、中右(1994)のモダリティ理論で問題となる*casually*を巡る議論について、モダリティ領域から命題領域への認知転換の可能性を検討した。

*本研究は、日本学術振興会平成19年～20年度科学研究費補助基盤研究(C)課題番号No.19520417の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿は、紙数制限による論文全体の整合性を保つため、加藤(印刷中)と重複する部分を含んでいることをあらかじめ断っておく。

注

1. 例文はいずれもQuirk et al. (1985)による。
2. 認知転換に伴う詳細な議論については、加藤(印刷中)を参照されたい。

参考文献

- Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.
- 加藤雅啓(印刷中)「It分裂文の焦点とモダリティ表現*—命題領域とモダリティ領域の認知転換と総記的含意—」,
International Journal of Pragmatics Vol. XVII, Pragmatic Association of Japan.
- 中右 実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店、東京。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Adjuncts and Subjuncts in the Focus Position of *It*-cleft Sentences

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article is concerned with the adverbials in the focus position of a cleft sentence. The main points argued are:

(i) why frequency adjuncts as well as means, instruments, and agent adjuncts can readily become the focus of a cleft sentence, and (ii) why acceptability of manner adjuncts, which cannot be the focus of a cleft sentence, is increased if they are modified or if the focal clause is interrogative or negative. We will investigate these issues in the framework of Nakau's (1994) theory of modality and cognitive shift, and elucidate the semantic properties of adverbials appearing in the focus of a cleft sentence.

* Division of Languages: Department of Foreign Languages